

ステップ・アップ

東京都立南多摩中等教育学校 3年 佐々木 由宇

春休みの終わるころにはすでに桜は散り始め、今ではほんのり緑かかっていた。

入学式が終わり、先生の指示に従って教室に戻る。中学校の教室は、小学校の教室より寂しい。これから張り紙が張られたり、日直の名前が書かれたりして賑やかになるのかもしれないと思うと、少しわくわくした。

「えー、私の話もこれまでにして、自己紹介に移りましょうか。とりあえず一人一分で」前髪が目に入りそうなほど伸びている先生の言葉を受けて、出席番号順に自己紹介が始まる。出身小学校を言う人や、趣味を言う人、緊張して一分間ずっともじもじしている人なんかもいた。

こんなのを四十人分聞くのか、と少し飽き始めてきたころ、見知った顔が教壇に立った。

「出席番号十番、木戸大吾です！」

「木戸大吾です。京都から引越してきました」

小学四年生の夏、木戸君は転入してきた。背は曲がっていて、声に快活さはない。モヤシだった。

木戸君は僕の隣の席になった。よろしくね、というと、少しだけ頭を下げた。

木戸君は、変な奴だった。例えば、授業中先生の話を聞かず、青空をじっと眺めていたり、教科書に落書きをしていたり。その落書きが面白くて、思わず笑ってしまった。

僕たちは次第に仲良くなって、同じマンションの同じ五階に住んでいたから、何回か一緒に登下校した。

木戸君は口数の少ない方だったけど、ユーモアがあったし、僕もしゃべるのが得意ではなかったから別によかった。

逆に、一部の子たちは木戸君を嫌っているようだった。

ある日、木戸君と鈴木君が同時に宿題を忘れたことがあった。先生は、鈴木君には怒ったのに、転校生の木戸君には「全然大丈夫だよ」なんて、みんなの前で言った。

木戸君がまじめに授業を聞いていないのがクラスの子にバレ始めた頃でもあった。それなのにテストは基本的に百点で、それがみんなを余計に苛立たせた。「なんであいつばっか」

教室のどこかから聞こえてきてもおかしくなかった。

僕たちの学校では秋に運動会があり、そのための練習が始まった。四年生全員が参加する種目は、ダンス、綱引き、それに百メートル走だった。本来なら週に二回しかない

体育の授業が、三回になった。そのほとんどをダンスに費やし、振り付けからフォーメーションの確認、掛け声など、やるべきことはたくさんあった。

それもすべて終わり、運動会まで残りわずかとなった時だった。百メートル走の練習で、木戸君が転び足を捻った。

「大丈夫？」

「分かんない。お医者さんには運動会には出れないって」

まあ、そんなに運動会好きじゃないし。そう言った木戸君の表情からは、決して強がっているようには見えなかった。

ある日の下校途中、マンシヨンの中庭で木戸君と鈴木君たちを見つけた。木戸君に何かを取られないようにして投げ回している。木戸君のふで箱だ。大切にしているペンがある、と聞いた気がする。それをみんなは、落としたり蹴ったりしながら笑っている。木戸君はそれを諦めて見ている。その反応が気に食わなかったのか、鈴木君たちはどこかに行ってしまった。

それを僕は、五階から見下ろしていた。

中学生になった彼は別人のようで、声が大きく、入って一か月で制服を着こなしていた。

「帰ってきてたんだ」

木戸君は五年生の時に京都に戻った。そのことに、当時の僕は少しだけほっとしていた。

「半年くらい前に。今の家がこの学校に近くてさ、ほんとにたまたまだったんだ。まさか君と出会えるとは思っていなかったから、びっくりだよ」

大きな体を揺らして、笑った。

中学校では、入学早々体育祭という大規模な行事がある。僕は自ら実行委員になり、準備を進めた。小学校では勇気がなくて自分からは何もできなかったけど、せっかく中学生になったんだから、という気持ちだった。クラス全員でやる大縄は、放課後に練習することになった。僕たち一年生が唯一活躍できる競技と言ってもいい。

「着替え終わった人から校庭行ってください」

僕が説明をしている中、一つの声が耳に入った。

「放課後まで残ってやる意味あんのかよ」

木戸だった。周りの席のやつらと、体育祭の愚痴を漏らしている。

お前は、そんなこと言えるやつだったか？

少ししてはっとした。初めて、木戸君に怒りを覚えた。かわいそうな奴だったから、友達がいないから、コミュニケーションが取れないから。いじめられっ子だから。僕が無意識のうちに感じてきた、木戸への憐み。そんなのはもう、ない。そして、なくなっ
てしまえば木戸はろくでもない奴だ。

小学生のとき、みんな一生懸命練習して、楽しみにしていた運動会に対して「そんなに好きじゃない」と吐き捨てた。結局、当日は応援にすら来なかった。そんな奴。

大縄の練習が終わり、教室のある四階を目指す。縄を回す担当だった僕は、真っ赤になった掌で縄の入った袋を抱えていた。最初の練習だったから、ほんの数回しか跳べなかった。

男子たちが、階段を駆け上がっていく。何人も、抜かしていく。疲れた腕に縄は重い。

大きい肩が、僕にぶつかかった。思わず、ぶつかってきた相手を睨んだ。その相手、木戸は、一段飛ばしで階段を上って、あっという間に姿が見えなくなってしまった。

僕の方を見ることもせず。僕は、木戸の背中を、下から見上げていた。